

に基づいてボタンが押される。日本が本当に非核三原則をつらぬき通している間は理論的にはあり得ない筈だが、何があってもおかしくないのが戦争というものだから、可能性としては否定出来ない。ボタンを押す決断は多分緊急を要すると思われるから、日本の為政者は「世論の重みに充分思いを致さず」にアメリカとの合意に走ってしまうこともあり得る。

h)日本の強い反対にもかかわらず、又はアメリカが日本へ相談することも無しに、アメリカ単独の判断でボタンが押されるケースで、可能性としてはこれが一番高い。核が日本の領海方面から飛んで来れば、「日本は反対していたのに」とか「日本は知らなかった」と云い訳されても、被害を受けた国にしてみればどの国の意志で発射されたものかは区別出来ず、第二・第三の攻撃を受けない為にも短時間で決断し、核が飛んで来た方向に向かって報復を開始することになる。

日本の領海内に核が存在することが「限りなく黒に近い」ならば、中国に限らず日本の近隣諸国のすべてが上記3つのケースを想定して、恐れおののき、疑いの目で見つめ、或いは対抗措置の模索を試みようとする心境には無理からぬものがある。

⑤アメリカ軍が日本に駐留する目的には大きく分けて3つあると思われる。それは、

i)世界の警察官として極東からインド洋やペルシャ湾に到る広い地域、特に紛争多発と思われる東アジアと東南アジアに於けるモメ事を力づくで押さえ込む。

ii)安保条約に基づき、有事に際し日本の国防に手を貸すこと。同時に日本の軍拡を押さえ込むこと。

iii)朝鮮半島38度線に張りついている国連軍の一員であるアメリカの朝鮮派遣軍の「後詰」として至近距離の日本で待機すること。

そこで隣国中国として考慮しなければならないことが2つある。それは、

i)韓国はアメリカの核持ち込みを否定してはいない。韓国に配備されている核兵器が1000発にのぼることは衆目の一致するところであり、秘密でも何でもない。問題は多過ぎる点である。北朝鮮だけが仮想敵国であるならば、大小10発程度の核兵器で小さな北朝鮮を壊滅できる筈で、残りの900発以上の核はどこへ向けて配備されているのかと素朴な疑問が出て来る。東アジアの地図を広げると極東ロシアの一部にもかかるが、中国の重要都市のほとんどが短・中距離核の射程に入ることが解る。

ii)朝鮮半島に有事が発生すれば、既に現場に張りついているアメリカ軍は、核を有効に活用して対処するものと思われるが、その際「日本で待機してい

る後詰」の方は直ちに朝鮮半島方面へ応援に駆けつけるに違いない。しかし、はたして通常兵器のみを携えて行くであろうか。問題は上記3つの役割を担った「世界の警察官」と「国連軍メンバー」としてのアメリカ軍がゴッチャになって、もつれた戦場によく見られる「見境のない」そして「核」を多用した乱戦に陥りはしないかという心配である。

⑥アメリカ軍が日本に駐留していることによって日本は自前の核兵器を開発せずに済んでいる。もしアメリカ軍が日本から完全に撤退すれば、日本は遅かれ早かれ核開発へ向かうものと想像している。これはアメリカのキッシンジャー元国務長官やシンガポールのリー・クアン・ユー元首相も云っていることで、中国人の偏見ではない。

日本が「核は絶対に開発しない」と繰り返し宣言しても、中国の3倍以上の軍事費を投入していながら「自衛隊は軍隊ではない」と云い張って止まない日本の釈明は、核実験を一度もしたことのない北朝鮮やイラクが「核兵器の開発はしていない」と言明しても多くの国々が信用していないのに似ている。

⑦中国は世界に先がけて軍縮を敢行している。中ソ・中印・中越紛争当時に400万人も居た解放軍が胡耀邦の時代に100万人を削減、その後も趙紫陽・江沢民の代になって更に50万人減らし、今では250万人になっている。トータルの戦力をなるべく落とさない為には兵器を新しいものに代えつつある。費用もかかるが、これは中東のテロ集団や中南米のゲリラでさえ昔の解放軍の武器より勝れたものを持っている時代だから已得ない。しかし通常兵器の整備には金がかかる。

250万人に減っても全員に最新兵器を持たせ、しかも十分な訓練を施すのは極めて困難、演習するだけでも莫大な費用がかかる。今の解放軍の将兵には実戦の経験のある者はほとんど居ない。これからは演習もあまりやらず、国境警備にテロ対策と災害救助が中心的役割になってくるだろう。

核の方もアメリカやロシアに比べても極く少量しか保有していない。外国の理不尽な恫喝に対し「ノーと云える中国」になる為には少量であっても常に精度を高く改良した核の保有は欠かせない。現在解放軍には13,000人以上の博士と修士の称号を持った人材が居る。こういった専門家が更に増えて、国際的なバランス感覚を身につけ、解放軍は軍隊というより技術者集団になって来るものと思われる。軍楽隊の演奏に合わせて兵隊が行進する時代じゃなくなるだろう。日本の自衛隊はどうか知らないが。

(次号に続く)